

足利風

ashikaga-fu

2025
春号
Vol.93



画：伊村恵利佳
書：風喜人

足利市民活動センター

開館時間：平日 10:00~19:00

休館日：土・日・祝日・第3月曜日

〒326-0052

栃木県足利市相生町1-1

足利市生涯学習センター3F

TEL 0284 (44) 7311

FAX 0284 (44) 7312

Mail info@shimin-act.jp

HP <http://www.shimin-act.jp>

HP QR コード



☆ ご案内 ☆

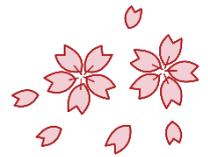
- * 特集！
「花の供養に~桜の花びらをひとひら~」
- * 言葉のあやとり
- * マチのちゃぶ台
- * 私のボランティアことはじめ
「足利文林の冒険」
- * INFORMATION

* 特集！ *

「花の供養に～桜の花びらをひとひら～」

ボランティアで胎児性水俣病児支援に行くたびに、{苦海浄土}の作家・石牟礼道子さんとお話をした。時々「花の文（ふみ）を」についても語りあった。

・・・きよ子は手も足もよじれてきて、手足が縄のようによじれて、我が身を縛っておりましたが、見るのも辛うして。それがあなた、死にました年でしたが、桜の花の散ります頃に。私がちょっと留守をとりましたら、縁側に転げ出て、縁から落ちて、地面に這うとりましたですよ。たまがって駆け寄りましたら、かなわん指で、桜の花びらば拾おうとしよりましたです。曲がった指で地面ににじりつけて、肘（ひじ）から血い出して、「おかしゃん、はなば」ちゅうて、花びらば指すとですもんね。花もあなた、かわいそうに、地面ににじりつけられて。何の恨みも言わんじやった嫁入り前の娘が、たった一枚の桜の花びらば拾うのが、望みでした。それであなたにお願いですが、文（ふみ）ば、チツソの方々に、書いて下さいませんか。いや、世間の方々に。桜の時期に、花びらば一枚、きよ子のかわりに、拾うてやっては下さいませんか。花の供養に・・・



ボストンで出版された岡倉天心「茶の本」には“花”のことが多く記載されている。～初めて花を活けたのは仏教徒だ。彼らは生き物への心やりのあまり、暴風に散らされた花を集めて、それを水おけに入れた。

ボストンのハーバード大学医学部教授ジルボルト・テイラーは、37歳の時、脳卒中で左脳機能を失った。“私は流れている！・・・自分が何兆個もの細胞や何十キロの水でできていることは、体が知っているのです。つまるところ、私たちのすべては、常に流動している存在なのです。

あはれ花びらながれ おみなごに花びらながれ おみなごしめやかに語らいあゆみ うららかなあしおと空に流れ おりふしに瞳をあげて かげりなきみ寺の春をすぎゆくなり み寺のいらか縁にうるほひ 廂（ひさし）廂に 風鐸のすがたしづかなれば ひとりなる 我が身の影を歩まする いしのうへ =三好達治= (M生)

* 言葉のあやとり *

Tao= 老子の教える道・道教 ⇒Zenと同様で、独・仏などでも国際語！

⇒人間のする“行き過ぎ”に警告！

=所有 (possession)・自己主張 (self-assertion)・支配 (domination)！

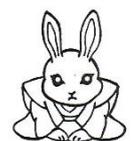
～それを戒めて、「争うな」「足るを知る」という言葉を発している！

* マチのちゃぶ台 *

『THE ART OF 北の郷物語』では、多くの方にご来場いただきまして厚くお礼申し上げます。ゆっくりとお話させていただくことができなかつた方には、大変失礼しました。会場へお越しになれなかつた方もメッセージやお心遣い、本当にありがとうございました。また開催にあたりご支援、ご協力を賜りました足利市民活動センター、わたらせテレビ、報道関係の方々をはじめすべての皆さまに心より感謝いたします。私自身、原点に立ち返ることができて、新たなビーコンも見えた充実の7日間になりました。

今後ともよろしくお願ひ致します。

中島 太郎



私のボランティアことはじめ

「足利文林の冒険」

中島太郎



『学びに終わりなしさ、ワトソン。一連の教程の最後に最大のものが待っている。』（シャーロック・ホームズ／赤い輪より）

足利文林会は、昭和54年に三田忠夫氏ら有志24人の発起により足利の芸術文化の推進を目的に発足、その翌年に総合文芸誌「足利文林」が創刊されました。初代三田会長が創刊号のあとがきで「さて足利は古くから文化度の高かったところであり、このことは「萬葉集」巻二十の「防人の歌」のなかに、足利防人の歌三首が収録されていることから知られるところでもあります。その後足利学校の存在が大きく浮かび上がり、そのために一般庶民の文化活動が対外的に薄れてしまい、「足利は文化不毛の地である」との甚だ不名誉なレッテルを貼られてしまいましたが、江戸期における文人などの活躍を見るときに、それがいかに皮相な見方であったかに気付くのであります。その意味においても「足利文林」の出発は意義あるものと思います。」と願っていた通り、評論、小説、詩歌、随筆、論文など幅広いジャンルにおける個人の創作や研究活動に対して文芸の枠を超えた自由闊達な作品発表の場を提供し続け、同人・会友は延べ300人、掲載作品3万点、76冊7万部を発行しました。

私は、三田会長の急逝で佐藤里弘氏が二代会長に選任された平成10年、当時副会長だった父・中島彗雄氏の勧めで同人の末席を汚させていただき、新体制のスタートにともない「力強く飛翔する鳥」というイメージで第46号の表紙絵を頼まれました。平成12年に父が三代会長に就任した翌年、足利市北部地域の民俗史話を「北の郷物語」として初出稿し、5年後、この取り組みが評価され第22回足利文林賞をいただきました。33年間にわたって地方文化への渴望を満たしてきた文林会でしたが、会員と読者の高齢化、メディアの多様化、資金難などの厳しい運営に直面し、平成24年、惜しまれつつ活動に終止符を打つことになり、すべての掲載作品が終刊号で打ち切りを余儀なくされました。私も11年に及んだ連載のしめくくりで文林会を158話目に取り上げ、挿絵には14年前の表紙絵の鳥が雲間を遠く飛び去って行く姿を描きました。そして1年後、旧足利市民活動センターで目録やバックナンバーなどを展示した記念展「文林の時代・足利のエポック展」が開催され、それが“最後の事件”になりました。

それから11年の歳月が経ち、父をはじめ多くの先生方が鬼籍に入りましたが、最近「文林があったらなあ」と思うことがよくあります。それは単なるノスタルジーではなく、度重なる自然災害や戦渦に加え、長引く不況で伝統的な価値観が廃れ格差が拡大、漠然とした不安感が蔓延する中、手軽なSNSより記憶に残る紙媒体で「自分の言葉を残したい」という想いを吐露する人が増えてきたからです。そうすると文林が「時代の役割を全うした」というかつての認識は誤りで、巧妙なトリックが仕掛けられていたのでは——と思い当たりました。確かにそのシントロピー（蘇生）ドラマは、記念展ですでに予言されていましたよね、ホームズ先生。（THE END?）

* INFORMATION *

※コロナ感染対策により内容が変更・中止になる場合があります。

☆「まちの縁側」～読書サロンへのご招待～

だれにでも心に残る一冊の本があります。童話・小説・詩集・・・等々。
その一冊の本を導きの糸として、案内人を囲んで、参加者のみなさんと一緒に、
ワイワイガヤガヤ・・・と。新しい人との出会いや物語を紡いでみませんか。

★令和7年4月13日(日) AM10:00～12:00

* 本 : 「極楽征夷大將軍」(垣根涼介)
* 案内人 : 鈴木 光尚 さん

★令和7年5月16日(金) PM2:00～4:00

* 本 : 「山頭火句集&放哉句集」
* 案内人 : 日下部 悲天 さん

★令和7年6月20日(金) PM2:00～4:00

* 本 : 「職人」(永六輔)
* 案内人 : 飯島 秀雄 さん

■参加費: 無料

■会場/問い合わせ: 足利市民活動センター ☎44-7311

☆「企画展」(交流コーナー) (土・日・祝日・第3月曜日は休館日)

* 4月 7日(月)～4月17日(木)	NPO法人 足尾に緑を育てる会展
* 4月22日(火)～5月 1日(木)	風喜人墨書展
* 5月 7日(水)～5月15日(木)	足利リビルドの会展
* 5月20日(火)～5月29日(木)	絵師・伊村恵利佳&仲間たち展
* 6月 2日(月)～6月12日(木)	彩美会水彩画展
* 6月17日(火)～6月26日(木)	足利の職人たち展
* 6月30日(月)～7月10日(木)	楽しいスポイト画の世界展

※展示時間・・・10:00～19:00 ただし最終日は15:00まで

☆「相談室」

* 相談室 = 4月13日(日) 14:00～16:00 「猫と犬の上手な育て方」
5月14日(水) 14:00～16:00 「足利義兼の真実」
6月11日(水) 14:00～16:00 「フードバンクのすべて」
* 講座 = 4月23日(水) 14:00～16:00 「SDGsと地域福祉」
5月28日(水) 14:00～16:00 「SDGsとジェンダー」
6月25日(水) 14:00～16:00 「子どもの権利条約を活かしたまちづくり」

編集後記

「能登は優しや土までも・・・」という言葉がある。“土徳”という、その土地に染み込んだDNA(遺伝子)。その土地が持っている癒しの力。ひとり人間を過去の中に根づかせ、未来へと生かしていく限りない持続を含んだ地域。

自分の日々暮らす足元を見つめ直すことで、ひとり一人が自信と誇りを持つところから新しい“まちづくり”は始まる。

～行く春の能登の輪島の千枚田～行く春と雨の中にて別れけり(悲天)～

(カサブランカ)